

上代文学における「王権の中の死」

— 反乱者の場合 —

蝦名翠

一

人間が社会の中で生きてゆく以上、本来は個人的なものであるはずの死もまた、社会との関わりを避けることはできない。むしろ社会が人間の「死」を定義するともいえる。人間が共同体を作り、その中で生活するようになった時に「社会の中の死」は始まっている。そして共同体が国家に発展すると、「死」は国家の中でとらえ返され、位置づけられるようになる。

古代日本において、中央集権国家の体裁を整えてゆく過程で、「死」は律令という法によって定義され整備される道をたどってゆく。大化二年（六四六）三月二二日、孝徳天皇・中大兄皇太子らを中心とする政権は薄葬令を發布し、葬儀・埋葬を制度化した。同時に發布された旧俗の改廃に関する詔は、当時しばしば起こった路上死をめぐるトラブルに関するもので、家の前で役民が病死した時に家人が死者の同伴者に財物を要求す

ることや、川で溺れ死んだ者の仲間から祓除を強要することを禁じている。死が穢れとして忌避された当時は、死者の穢れがその地に宿り、その地に住む人間やその地を通過する旅人たちを脅かすと考えられていた。その「損害」を死者の関係者に被らせようとして起こるトラブルの是非をめぐり、律令は否定という判断を下した。死に対する人の心や因習に、法が直接介入した最初期の例である。

国家の中心となるべき帝王の死は、国家そのものにダメージを与える大きな「死」となる。帝王、またはその配偶者や近親など皇帝と縁深い人物の死は、国家を挙げて悼まれ祀られ、鎮魂される。逆に、国家を揺るがそうとした反逆者は死を以て罰せられる。王権に仇なし、王権によって滅ぼされた者の魂は、悪霊と化して王権を蝕むと恐れられた。桓武天皇の御世、藤原種継暗殺事件（延暦四年（七八五））に連座して皇太子の身分を廃され憤死した早良親王が悪霊と化して桓武や后皇子に祟つたと恐れられ、ついには崇道天皇を追号された事件は有名だが、それ以前にも「王権に滅ぼされた皇族の祟り」は存在したようである。

例えば『薬師寺縁起』には、朱鳥元年（六八九）に草壁皇太子への謀反の罪で誅された大津皇子が「悪龍」と化して毒を吐き天下を脅かし、その鎮魂のために龍峰寺が建立されたという逸話が登場する。このような伝説が生まれた背景には、世人が大津皇子の怨念を恐れていたということがある。大津皇子の変の三年後、持統称制三年（六八九）に草壁皇子は即位することなく薨去しており、その天逝に世人が大津皇子の祟りをみようとしたことは想像に難くない。薬師寺が、大津・草壁両皇子の父であった天武天皇と草壁皇子の生母持統天皇と縁深く、称徳天皇まで続く天武皇統ゆかりの寺でもあることを考慮しても、大津皇子悪龍伝説が『薬師寺縁起』に書かれていた意味は重い。また、『日本霊異記』中巻第一縁では神龜六年（天平元年、七二九）に讒言により妻子と共に自殺に追い込まれた長屋王（『日本霊異記』では長屋親王）の説話が語られるが、長屋親王の遺骨は「焼き末くだぎ、河に散らし、海に擲すて」られた末土佐国に漂着、同地で祟りを発し民を多く殺した

ため、平城京により近い紀伊国海部郡あまのこほりは椒抄はじかみの奥嶋おくのしまに移されるといふ展開をたどる。長屋王と彼の妃で夫に従い殉死を遂げた吉備内親王の葬については、『統紀』天平元年（七二九）二月一二日条には、葬儀を醜くせぬようにとの詔が出ており、史実と食い違うが、この描写には、謀反人の死骸が古代日本においてどのように処されたかをうかがわせる。多田一臣氏は『日本霊異記』の長屋親王の遺骸処置は「その霊の再生・報復を避ける意味をもっていた」と考察する（多田「大津皇子物語をめぐって」、『古代国家の文学』所収、三弥井書店・昭和六三年）。過去に遡って皇極四年（六四五）六月一三日条では、賊徒として死に追いやられた蘇我蝦夷・入鹿父子の屍を墓に葬ることと、「哭泣」を許可している。これらの詔はいずれも、謀反人・逆逆者の葬儀を見苦しくなく行なうのが異例であったことを逆説的に示している。

『葉師寺縁起』の大津皇子悪龍説と『日本霊異記』の長屋親王悪霊説、いずれのエピソードからも、王権のために滅ぼされた者たちの残した怨念に対する王権の、天下の恐怖が決して小さくはなかったことがうかがわれる。これら王権を滅ぼしかねない怨霊をいかに浄化させ、王権の中に取り込んでゆくかが、天皇を頂点に据えた中央集権国家化を進めていた当時の日本の王権の大きな課題であった。

本論では、王権侵犯者——特に皇族出身の王権侵犯者について、その死と鎮魂が、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などに代表される上代文学においてどのように扱われたかに迫る。『古事記』、『日本書紀』は天武皇統の天皇たちのもとで編まれた天武王権の歴史書である。日本最古の和歌集『万葉集』は宮廷歌集の性格が強い。特に天武天皇皇子女の相聞歌群・挽歌群が多く収録されている巻二については、『古事記』中・下巻の描く宮廷史の伝統を継承するものとして、皇子女の相聞歌群の源流が記紀に登場する反乱や禁忌侵犯の恋の伝承にあると解する森朝男氏の研究（森「雑歌・相聞・挽歌」『恋と禁忌の古代文芸誌』所収、若草書房・平成一四年）をはじめとして、現在もさまざまに議論されている。王権の聖性・正統性を謳うこれらの文学に登場

する、王権を脅かす謀反・反逆の物語は、当然ながらいずれも王権の力によって鎮圧され破滅する結末を迎える。反逆者が打ち斃されることよって王権の聖性はいよいよ高まり、正統性は保証される。しかしだからこそ、王権の犠牲となつた反逆者たちの魂は手厚く鎮められなければならない。反逆者が王族（皇族）である場合はなおさらである。王権の中に身を置きながら王権に叛旗を翻し、王権によって破滅させられた者たちを描く時、恋の禁忌侵犯の物語という形で描かれていたことが明らかになっている。

一一

王権侵犯を恋の禁忌侵犯の悲劇として描くことで、反逆者の悲惨な死を昇華させようとする物語の基本的展開としては、反逆者が王権の力を得ようとするにあたり天皇の妃や皇太子妃など「王権の所有する女」の愛を得ようとする展開がある。天皇の後妃または皇太子妃を得て皇位を篡奪しようとする最初の物語としては、神武記の終盤、神武崩後にその子当芸志美々命が、神武と皇后伊須余理比売の間に生まれた三人の異母弟を殺して皇位を奪う前に、まず継母にあたる伊須余理比売を娶るエピソードが挙げられる。年長とはいえず天皇の庶子である当芸志美々命は先帝の后を娶ることで帝王としての靈力を得ようとしたとみるべきであろう。

皇后は天皇の正式な妻として後宮を治めるだけでなく、天皇の御代を守る王権の巫女としての役割を担っていたと考えられる。森朝男氏は、彦姫制（兄妹など血族関係にある男女が男は政、女は祭をそれぞれ分担し協力して支配する古代小国の支配機構）を踏まえ、天皇と后妃も王権の中で擬制的に兄妹の関係となると指摘する（森「婚の禁忌の諸段階」『恋と禁忌の古代文芸誌』所収）。国の政を司る天皇に対し、皇后は国の祭祀を担う。王権の巫女たる皇后を我がものにするには、王権の靈力・権力を手に入れることにもつながる。

天皇または皇太子に命じられて妃候補のもとに出かけ、その妃候補を横取りするという筋書きも登場する。景行天皇に命じられて美女を求めた大碓命おほすののみことが女たちを我がものにして復命しないエピソード（景行記・景行紀）や、履中前紀、皇太子時代の履中天皇に命じられて太子の婚約者黒媛に使者として赴いた皇弟住吉仲皇子が、皇太子と偽り黒媛を得る物語などである。大碓命は双子の弟である倭建命（景行紀では「日本武尊」）とは対照的に皇族にふさわしからぬ卑劣な皇子として描かれ、記紀ともに皇位を継ぐことはない。住吉仲皇子は最終的には皇太子に謀反を起こす。王権の聖性に挑戦する、あるいは王権を受け継ぐにふさわしくない皇子の行動を語る話型として定着していたのであろう。

仁徳天皇記紀に登場する速総別王はやぶさけのみこ（『日本書紀』では「隼別皇子」）と女鳥王めとりのみこ（『日本書紀』では「雌鳥皇女」）の反乱の物語もまた、仁徳帝の命を受け仲人として女鳥王のもとに向かった速総別王が、女鳥王と結ばれてしまい復命しないという展開から始まる。ことの次第を知った仁徳は寛大にも黙認するが、やがてこの禁断の恋人たちは、天皇に対して謀反を企て始める。さしもの仁徳もこれには黙っておられず軍を差し向け、恋人たちは逃避行の末誅殺される。

速総別王（隼別皇子）は物語の冒頭ですでに、王権に反する存在としての行動をとる王の女を我がものにするので、謀反の前段階が敷かれる。ただし『古事記』と『日本書紀』では、この禁忌の恋の主導権——それは王権に対する謀反の主導権でもある——を握る者が異なる。『日本書紀』では、

時に隼別皇子、密に親みづから娶とりて、久ひさに復命かへりしまつさす。

と、隼別皇子が自らの意志で雌鳥皇女を娶るように読み取れる。一方『古事記』では、天皇の結婚の使いと

てやってきた速総別王に、女鳥王が次のように言つて、男を禁断の恋へと誘うのである。

大后の強きに因りて、八田若郎女を治め賜はず。故、仕へ奉らじと思ふ。吾は、汝命の妻とならむ。

大勢の後妃の愛を得て後宮を円満に治めることは、天皇の重要な徳のひとつと認識された。しかし仁徳天皇の皇后石之日売（景行紀では「磐之媛皇后」）は仁徳への深い愛ゆえに非常に嫉妬深く、仁徳は皇后の嫉妬に振り回されていた。仁徳が異母妹の八田若郎女（仁徳紀では「八田皇女」）を娶つた時には、皇后は嫉妬のあまり、一時的に都を離れてしまつている（仁徳紀ではとうとう都に帰ることのないまま崩じ、仁徳は皇后に八田皇女を迎える）。女鳥王は「大后の強き」に天皇が負けて後宮を治めきれなかつたことを理由に、仁徳の愛の支配から背を向けることを宣言し、自ら速総別王のものとなつてその言葉を実行する。それは仁徳の王権に背くことでもあつた。

謀反に至るまでの道順も、仁徳記と仁徳紀では異なる。仁徳記では、女鳥王の心が自分ではなく速総別王のものになつてゐることを知つた仁徳が引き下がつた後、女鳥王が「夫」速総別王に、

雲雀は 天に翔る 高行くや 速総別 雀取らさね（六八）

と、仁徳（皇子時代の名は大雀命）を雀に、速総別を天翔ける雲雀よりも優れた雉に喩え、叛意を吹き込むに至り、仁徳はふたりの謀反の意志を認め、王権の秩序を守るために軍を起こし征討する決意を固める。

一方仁徳紀では、反逆の恋人たちに対する仁徳の恨みがつり、ついに誅滅を決意するまでが、順を追つて

丹念に描かれている。仁徳は雌鳥皇女の織女たちの詠う「ひさかたの 天金機あまかなばた 雌鳥が 織る金機 隼別の 御糞料みおずひがね」という歌謡により隼別皇子の裏切りを知って「恨」を抱くものの、皇后八田皇女の諫言もあり、また兄弟としての義に惹かれ、異母弟の裏切りを罰しなかった。その後、隼別皇子が雌鳥皇女との寝物語で、雌鳥皇女を娶るに遅れをとった天皇を愚弄したことにより仁徳の押さえ込まれた恨みはさらにつのる。そして隼別皇子の舎人とねりらが詠う歌謡「隼は 天に上り 飛び翔り 斎いづまが上の 鶺鴒いづま取らさね」を受けて、仁徳は隼別皇子を滅ぼすことを決意する。この時仁徳は、

朕、私の恨を以て、親はらからを失はまほしみせず、忍びてなり。何ぞ齎きすますとして私の事をもて社稷くにに及さむ。

と声明する。彼は、自身の決意が女を奪われた「私恨」ではないこと、むしろ「私恨」のために血を分けた弟を殺すのを避け、屈辱を忍んだのであり、王権が謀反という形で害されようとしたからこそ弟を滅ぼすのだと強調している。そのことによつて、反逆者として死んだ皇族を滅ぼした（滅ぼさざるを得なかった）帝王の正義・正当性を描くことによつて、王権の正当性を主張したともいえる。

禁断の恋に落ちた皇族の男女が謀反を企てる具体的な描写がなくとも、禁忌の恋の侵犯を描写することで王権に背いてしまったことを描く話型もある。允恭記の木梨きなしのかるのおほみこの軽太子かるのおほらつめと軽大郎女の近親相姦の物語がその典型といえよう。軽太子は允恭天皇の崩後、即位を控えた皇太子の身分でありながら、同父同母の妹である軽大郎女に通じ、二首の歌謡を歌う。

あしひぎの 山田を作り 山高み 下樋したひを走せ 下訪したたひに 我が訪ふ妹を 下泣したなきに 我が泣く妻を 今こ

夜こそは 安く肌触れ (七八)

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも 愛しと さ寝しさ寝てば 刈薦の
 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば (七九)

この後、百官と天下の人々はみな軽太子から心が離れ、「是を以て、百官と天下の下の人等と、軽太子を背きて、穴穂御子に帰りき」、異母弟の穴穂皇子を支持する。軽太子は事態を畏み、大前小前宿禰の邸に逃げて兵器を作るも、結局は穴穂皇子の軍に囲まれ、大前小前の配慮によって捕縛され異母弟に降服、伊余湯に流される。軽大郎女もその後を追ひ、ふたりは共死を遂げる。皇太子がその地位を追われるという異様な事態を招いたものは、同母妹との近親相姦という皇太子自身の禁忌侵犯にあった。

允恭紀でもこの兄妹（允恭紀では「木梨軽太子」と「軽大娘皇女」）の禁断の愛は書かれるが、軽太子自身の失脚とは直接は結びつけられず、允恭在位中の出来事とされる。この恋は、天皇の食事の羹汁が夏だというのに凍りつく怪事を天皇が怪しんで占わせたところ、「内の乱有り。蓋し親親相姦けたるか」と近親相姦を思わせる結果が出、さらに木梨軽太子が軽大娘皇女と通じていると注進する者があつて調べたところ禁忌侵犯が明らかになる、という顛末をたどる。古代日本の王権において卜占は新都となるべき土地の吉凶や戦鬪の勝敗、病の原因などを知るためだけでなく、謀反にも深い関わりがあつた。時代はやや下るが奈良時代半ば、淳仁天皇の御代、藤原仲麻呂が反乱を起こす前に陰陽頭大津大浦に事の吉凶を問うていたとある。大浦は自分の卜占を当てる仲麻呂の逆心を「知」り、朝廷に密告、仲麻呂が乱を起こし討伐された天平宝字八年（七六四）には従四位上と大津宿禰を賜っている。彼が仲麻呂の反逆を「知」つたその手段は、やはり卜占であつたと思われる。あるいは仲麻呂と敵対していた孝謙上皇（仲麻呂の変の後称徳天皇として重祚）派の

命を受けたスパイのような役割を果たしていた可能性も考えられる。仲麻呂側と孝謙上皇側とが共に大浦の卜占を利用しようとし、卜占を味方につけて有効活用することのできた後者が勝利し、卜占に見放された前者が敗死の憂き目をみたこの事実は、当時の卜占の果たした役割の一端をうかがわせる。軽太子と軽大娘皇女の恋はこの卜占によって暴かれた。皇太子と同母妹の姦通は、国家を傾けかねない事件としてとらえられている。

允恭紀では軽太子は罰せられず軽大娘皇女が伊予国に流されるが、允恭亡き後、軽太子が人心を失うのは変わらない。その理由は、「暴虐行て、婦女に淫けたまふ」（安康即位前紀）と書かれている。婦女に淫するということには、軽大娘皇女との近親相姦も含まれているであろう。允恭紀では軽太子は同母妹との恋によつては罰せられないとはいえ、皇太子の資格を失つたも同然であつた。

卜占によつて恋が発覚するモティーフは、『万葉集』巻二にもみられる。天武天皇第三皇子である大津皇子が詠んだとされる一〇九番歌は、石川郎女と呼ばれる女性との恋愛関係が「占」によつて露頭したという設定のもとに詠われている。

大津皇子の石川郎女に贈れる御歌一首

あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに（二・二〇七）

石川郎女の和へ奉れる歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましもを（二・二〇八）

大津皇子の竊かに石川女郎に婚ひし時に、津守連通のその事を占へ露はすに、皇子の作りませる御歌

一 首

大船の津守が占に告らむとはまきしに知りてわが二人宿し(二・二〇九)

一〇九番歌題詞で「占」によって大津皇子と石川女郎の関係を露わにしたとされる津守連通は、元明・元正朝に陰陽道の第一人者として活躍した実在の人物である。大津皇子らの時代からは約四十年近く離れているが、むしろ津守が陰陽としての実力を認められ活躍していた元明・元正期に作られた歌であるとも考えられる。一〇九番歌の直前に配置されている一〇七・一〇八番歌は、大津皇子と石川女郎との贈答歌であるが、皇子が山の中でしづくにうたれながら女を待つという現実の恋としては異常な設定のもと詠まれたとされている。山の中で逢う約束をするほどに隠されなければならない恋——禁忌の恋が一〇七・一〇八番歌により暗示され、一〇九番歌に至り大津皇子はついに、石川女郎(郎女)と「竊かに」結ばれる。

一〇九番歌に登場する「竊」は『万葉集』題詞・左注中には他に五箇所に登場する。その中の一つ、一〇五・二〇六番歌は大津皇子が天武王権の王権神を祀る伊勢神宮に私的に参拝し、同母姉で伊勢斎宮を勤める大伯皇女と「竊かに」邂逅した際、大伯皇女が詠んだとされる歌である。

大津皇子の竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時に、大伯皇女の作りませる御歌二首
わが背子を大和へ遣るとき夜深けて暁露にわが立ち濡れし

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ(二・二〇五—二〇六)

『万葉集』には、「大津皇子歌物語」とも呼ばれるべき歌群が卷二相聞・挽歌部から卷三挽歌部にわたって登

場する。都倉義孝氏は、『日本書紀』『万葉集』『懐風藻』に登場する、大津皇子を主人公とした文学作品群について、全て後世の仮託であると主張し、『日本書紀』持統天皇称制前紀や『懐風藻』に載せられている大津皇子伝にみられる、大津皇子の文筆の才の過大評価がすでに奈良時代にはできあがっていたこと、皇位継承争いに巻き込まれ滅ぼされた大津皇子に同情するあまり、彼を主人公にした悲劇的に粉飾された物語が生まれ成長していったことを指摘し、『大津皇子物語』の生まれたきつかけとして、大津皇子を滅ぼさざるを得なかった時の権力者の悔恨と畏怖の念があつたと考察する(都倉『大津皇子とその周辺』『万葉集講座』五所収、有精堂出版・昭和四八年)。巻二相聞部に収録される一〇七一―一〇七二番歌も、実際に起きた事件を受けて実際に詠まれた歌とみるよりは、大津皇子という人物を中心に据えた物語的構成を持つ歌群としてとらえるべきであろう。

一〇五・一〇六番歌の解釈は、従来は大津皇子がただひとりの実姉大伯皇女に会いにいったという題詞を重視したものが多かったが、彼が国家の王権神を祀る伊勢神宮に「竊かに」参り、天皇の代わりに王権神を祭る第一の巫女たる大伯皇女に会つたというもうひとつの設定を軽視することはできない。大津皇子が、自らに敵対する朝廷の神宮を私的に参拝し、王権の巫女に会つていゝという設定そのものに、当時の読者は「王権への挑戦」という文脈を読み取つたであらう。

伊勢神宮は王権神を祀る神宮であると同時に、皇族でありながら王権からはじき出された者たちが身を寄せた地としてもとらえられていたようだ。景行記の倭建命は王権をも破壊しかねないその強暴な力を恐れられ、天帝によって東国征伐の勅命という名目のもと都から追われるが、東国に向かう前に伊勢神宮に参り、時の斎宮である叔母の倭姫命に「天皇の既に吾を死ねと思ふ所以や、何」と、天帝に疎まれ遠ざけられる哀しみを訴える。また仁徳紀の隼別皇子は雌鳥皇女を連れて伊勢神宮に参ろうとし、果たせぬまま途上で殺される。何ゆ

え彼らは、自分たちを滅ぼそうとする権力の守護神の膝元に身を寄せようとするのか。謀反あるいは謀反の嫌疑などで朝廷と戦わなければならなくなった者たちはその大半が、己が本拠地に身を寄せるが、王権の限りなく近くにいなながら王権と敵対することになった皇子女たちには、身を寄せることのできる地がもはやない。単別皇子と雌鳥皇女の場合は、仁徳天皇の放った軍勢に本拠地を追われて留まることができなかつたとと解せるだろう。倭建命の場合は天皇の勅命を背負い、王権神の加護を得に叔母齋宮のもとを訪れるのであるが、それは天皇の名代として東国征伐に向かう皇子を加護すると同時に、天皇に疎まれていた皇子を加護することにもなる。倭姫命はその名からもうかがえるように、倭建命とは男女一对を為す女性であり、王権の神威を担う倭姫命が、王権からはじき出された皇子倭建命を護る役割をも果たしていることを裏付ける。

慌しく伊勢に参り都へと戻る大津皇子を見送る大伯皇女の歌には男女の恋歌そのもの、特に一〇六番歌は旅路にある恋人を思う女の歌の形式が用いられている。それは、生きて帰れるか分からない危険な旅へと向かう恋人への思いの表現が、結果的に死地となる都へとただひとり帰ってゆく大津皇子に対する大伯皇女の不安への表現と共通するゆえである。題詞の「竊」は、大津が無断で天武王朝の王権神が祀られる伊勢神宮に参るすなわち、国家——天武王権に対する謀反を表現していると考えられるが、相聞歌そのものである一〇五一〇六番歌を読んだ受容者は、「竊」に恋愛禁忌の意をも受け取ったのではないか。その禁忌とは、木梨之輕太子と輕大郎女のように、同母の姉弟が愛し合う近親相姦の禁忌をさすのみならず、王権を護る伊勢神宮の頂点に立つ齋王が、実弟とはいえ反逆者に強い愛情を抱いてしまうという禁忌をも内包していたのではないだろうか。一〇五一〇六番歌は、大津皇子の謀反の存在を「大津皇子歌物語」の受容者に知らせる歌群であると同時に、伊勢齋宮という公の立場と大津皇子の姉という私の立場とからもたらされた自己矛盾の愛の悲劇を知らしめる歌群でもあったのではないだろうか。そこには王権の巫女・伊勢齋宮としての立場と、反逆者の弟の

護り手としての立場で揺れ動く大伯皇女の感情を、弟への恋慕という物語形式を用いることで昇華させようという意図が感じられる。

「竊」の問題に戻ると、『万葉集』中に登場する他の四箇所の「竊」も恋の歌であり、かつ物語的という特徴を持つ。川口常孝氏は、「竊」の登場する六首がいずれも男女の密通の意に用いられていると指摘する（川口「あかとぎつゆ」『万葉作家の世界』所収、桜楓社・昭和四六年）。

但馬皇女たぢまの高市皇子たけちの宮に在いましし時に、竊かかに穂積皇子ほつせきに接あひて、事ことすでに形かたちはれて作りませる御歌一首

人言ひとことを繁こみ言こと痛み己おのれが世によにいままだ渡わたらぬ朝川あさ渡る（但馬皇女・二・一一六）

おのれゆえ言ことらえて居ゐれば駙馬あそまの面高おもたか夫ぶ駄だに乗りて来きべしや

右の一首は、平群文屋朝臣益人へぐりのふみやのあそんの伝つたへて云いはく「昔聞むかしきかく、紀皇女きみづめ竊かに高安王たかやすと嫁よめひて嘖ころはえらえし時に、この歌を作り給ひき」といへり。ただ、高安王は、左降ひだりくだして伊与国守いよこくのかみに任まけらゆ。（紀皇女・一一・三〇九八）

昔者むかし壯士むすこと美うしき女むすめとありき。（姓名なはいまだ詳つとらかならず）二の親おやに告つげずして竊かに交ま接まを為なせり。時ときに娘むすめ子の意こころに親おやに知しらせむと欲ほす。因よりて歌詠うたを作り、その夫おとこに送おくりと与よへたる歌うたに曰いはく、隠こもりのみ恋こふれば苦くるし山の端はゆ出でて来きる月の顯あらば如何いかに（一六・三八〇三）

事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひわが背

右は伝へて云はく、「時に女子ありき。父母に知れずて竊に壮士に接ひき。壮士その親の呵嘖はむことを悚惕りて稍に猶予ふ意あり。これに因りて娘子のこの歌を裁作りてその夫に贈り与へき」といへり。
(二六・三八〇六)

一六番歌は太政大臣高市皇子の妃であつたらしい但馬皇女が穗積皇子と、それぞれ道ならぬ恋に走つた際の歌であり、三〇九八番の場合は、恋の露頭ゆえに紀皇女は叱責され、高安王は左遷される。これらの恋は密通——非公認の、禁忌の恋であつたと認められる。三八〇三・三八〇六番歌は物語性・伝承性の強い歌を多く集めた巻十六前半に配置されており、また「壮士」「美女」との呼称などから、背景に何らかの伝説があつたと考えられる。三八〇三番歌、三八〇六番歌の恋人たちは、親に関係を告白することで晴れて「婚」の段階に進める可能性があつたが、逆にその恋を許されず、仲を引き裂かれる可能性も同じくらいにある、非常に不安定な状態にあつた。

允恭紀二三年三月七日条の、木梨軽太子と同母妹軽大娘皇女との密通を「遂竊通」と表現しているのも、同じ禁忌の恋を遂げるための「竊か」である。「竊か」は、何らかの事情——禁忌のために、世間や国家に対して隠されていなければならぬ恋、または、未だ親や世間の公認を受けていない恋を合わせて、「隠されている状態の恋」のことを題詞で表現する時に用いられたと思われる。それは、禁忌の恋のみを表現するというよりは、禁忌の恋になり得る可能性を持つている、秘められた恋全般をさしたといえるだろう。

一〇九番歌の場合、大津皇子は、「竊かに」禁忌の女性である石川女郎と逢つたのだ。しかもそれを明るみにしたのは、朝廷に重用されている陰陽師(津守通)であり、卜占によって暴かれるものは、王権侵犯そのもの

のである。それを知った上で大津皇子は、「わが二人宿し」と、傲然と恋の成就の宣言を行なっている。
 一〇九番歌に続いて配置される一一〇番歌では、石川女郎が「日並皇子尊」から求愛されていたことが明らかにされる。

ひなみらみこのみこと
 日並皇子尊の石川女郎に贈り賜へる御歌一首〔女郎は字を大名児おほなごといへり〕

大名児 彼方野辺をちかたのべに刈る草の束の間もわれ忘れめや (二・一一〇)

日並皇子尊は『万葉集』中で用いられる草壁皇子に対する尊称である。石川女郎は草壁皇子に愛されている女性であった。皇太子の愛する女を奪った大津皇子が朝廷側にスパイされるのは当然のことであり、大津皇子の反抗する相手が王権そのものであることが判明する。なお、一一〇番歌には石川女郎からの反歌はない。女鳥王の心を得られなかった仁徳天皇と同様、皇太子の身分にありながら石川女郎を大津皇子に奪われた草壁皇子は「恋愛に敗北した王」となる。しかし、恋愛において王を破った謀反の皇子はそのままではいられない。恋愛禁忌の侵犯という名の王権侵犯はあらわにされ、破滅へと導かれてゆく。

三

記紀や『万葉集』が王権の書である以上、もちろん謀反者・反逆者は王権のもとに斃される結末を迎える。冒頭にも述べたとおり、謀反を起こした者は滅ぼされた後、正式な埋葬や鎮魂を受けることは稀であった。「王権の中の王権侵犯者」たちの物語の場合はどうであったか。

謀反の皇族の遺骸をめぐる物語としては、仁徳記の速総別王・女鳥王の死後のエピソードが印象深い。宇陀の蘇邇そにでふたりを討った軍の將軍山部大楯連やまのぶのおほたのむらじは、女鳥王の手に巻かれていた玉鈕たまぎら（玉に紐を通して作られた腕飾り）をはぎ取り、自分の妻に与える。後に豊明とよあかりが行なわれた時、氏族の女たちがみな参内する中、大楯連の妻は女鳥王の玉鈕を手に巻いて参り、石之日売命に見とがめられる。石之日売命は、皇后から各氏族の女たちに賜う大御酒おほみきの粕を、大楯連の妻には与えず、その夫を召して死刑に処する。その理由として石之日売命は次のように語る。

其の王等、礼無いきに因りて、退け賜ひつ。是は、異しき事無けくのみ。夫の奴や、己が君の御手に纏ける玉鈕たまぎらを、膚はだも焔あたたけきに剥ぎ持ち来て、即ち己が妻に与へつ。

謀反人とはいえ皇族であり、臣民の主人たる存在であった女鳥王の装身具を、死して間もないうちに奪つて妻に与えることは死刑に値する、と仁徳皇后としての石之日売命は判断する。この時、女鳥王の遺体は王権に反抗して滅ぼされた遺骸としてではなく、非業の死を遂げた皇族の遺体としてもとらえられている。ここでは女鳥王の遺体に損害が加えられたのではなく、彼女の装身具である玉鈕が奪われたのだが、主人の所有物を奪つて我がもの（妻のもの）とすることそのものが王権に対する侵犯、重罪として扱われる。また当時、玉たまの装身具は魂たま——靈魂が込められているものとして認識されていた。ほかならぬ女鳥王の「玉鈕」を奪つたことは女鳥王の靈魂を汚すことにも等しい。大楯連の犯した罪は、女鳥王の遺体を損なつたのとほぼ同等と当時のみなされたのではないだろうか。「王権の中の王権侵犯者」としての女鳥王の死の尊厳は、王権に逆らいながらも出自は王権に身を置くがゆえに、王権に守られているかのように描かれる。一方仁徳紀では、雌鳥皇女と

準別皇子の討伐軍を送る際に八田皇后が「雌鳥皇女、寔まことに重き罪に当れり。然れども其の殺さむ日に、皇女の身を露にせまほしみせず」と仁徳に訴え、そのように將軍たちに命じさせる。將軍たちは命令に背き雌鳥皇女の玉を探り、裳もの中から目的の玉を見つけて復命するが、その際にも皇后は「若し皇女の玉を見きや」と念を押す。そしてトヨノアカリの日（仁徳紀では新嘗祭のトヨノアカリ）にことが発覚すると、八田皇后は將軍を殺そうとするも私有地を献上して死を贖おうとする將軍を結局は許す。仁徳記とは相違点がいくつかあるが、「皇女の身を露にせまほしみせず」と望む八田皇后は、逃避行先で誅殺されるであろう女鳥王の遺体が損なわれないかを案じている。身崎壽氏は、物語の終盤で高められた、受容者の女鳥王（雌鳥皇女）への共感と同情を、玉の後日談を加えることで將軍の卑劣な犯罪の物語に転嫁させ、「論理のすりかえ」を行なうことで王権への不満の感情をそらしているとする（身崎「女鳥王物語論」『古事記 古代王権の語りの仕組み』所収、有精堂出版・平成七年）が、むしろここでは、皇女としての女鳥王（雌鳥皇女）の皇族たるアイデンティティが、たとえ誅殺されたとしても守られていることにも着目するべきであろう。

文学の上では、王権に背いた皇族の死が天皇の死に擬制されることもあった。例えば、反逆者ではないが、景行記、文帝を裏切った兄を手足をねじ切つてうち捨てるような「建たく荒き情こころ」を当の文帝に恐れられて王権から疎外され、都から遠く離れた異郷で無念の死を迎えた倭建命やまとたけるのみことの場合、大和に残つていた后や子供たちが詠つたとされる以下の四首の歌謡は、後に「大御葬歌」として天皇の殯宮儀礼の際に詠われるようになった。居駒永幸氏は倭建命の死をめぐる歌われた「大御葬歌」が天皇の殯宮儀礼の際に詠われるようになった理由として、「うたは基本的に王権に専有されるものと考えられるから、ヤマトタケルの死は大御葬のうたの起源として語られることによつて、王権の側から鎮魂されることになる」と指摘し、即位することなく異国で薨じた倭建命の悲劇的な死を天皇の死に擬することによって王権の側に回収し、魂を慰め鎮めようとしたのだと述べている

(居駒「天翔るヤマトタケル——歌謡物語の成立をめぐる——」『記紀万葉の新研究』所収、桜楓社・平成四年)。従うべきであろう。

「反逆者として死を賜った皇族が天皇の死に擬制されている例としては、『万葉集』巻三挽歌部に収録されている四一六番歌がある。大津皇子が死を目前にして詠んだとされる歌である。

大津皇子の被死らしめられし時に、磐余の池の般にして涕を流して作りませる御歌一首

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(『万葉集』巻三・四一六)

右は藤原京の朱鳥二年の冬十月。

磐余の池に鳴く鴨も今日で見納めかと詠う大津皇子は、自らの死を「雲隠り」と表現している。『万葉集』に登場する「雲隠る」の表現内容としては文字通り「雲に隠れて見えなくなる」ものの他に、「神が雲に隠れる」ことから「神の存在を示す」もの、転じて「天皇または皇族の所在を示す」もの、そして「貴人の死を示す」ものがある。人の死を「雲隠る」と表現する歌語を用いた歌は『万葉集』中には他に三首みられるが、うち一首は、長屋王の死後に彼の縁者と思われる倉橋部女王が詠んだ歌、

大君の命かしこみ大殯の時にはあらねど雲隠ります(三・四四一)

が含まれることは注目される。

「雲隠る」、すなわち天上に在る「雲」に「隠」れるという表現には明らかに、死者の魂が天上に昇るとい

思想が見え隠れする。例えば『万葉集』巻二挽歌部に収録される「大君は神にし座せば天雲の五百重が下に隠り給ひぬ」（置始東人・二・二〇五）には、「大君」が「神」であるからこそ、「天雲の五百重が下」に「隠」れたという思想が明確にあらわれている。近藤信義氏は、天皇をはじめ皇子らの日の御子たちは天孫降臨の思想に従い、死と共に天上の世界に帰ると認識されていたことを確認し、「雲隠り」の背景に天孫降臨思想をみている（近藤「謀反——大津皇子の悲劇を中心として——」、『万葉の虚構』所収、雄山閣出版・昭和五二年）。なぜ大津皇子に、天孫降臨思想を担った死の表現「雲隠り」が用いられたか。多田一臣氏は近藤氏の説に賛意を表した上で、天皇でもなければ皇太子でもない大津皇子の死がなぜ「雲隠る」と表現されなければならなかったのかについて、四一六番歌においては大津皇子は天皇に準じた人物として位置づけられていたのであり、それは四四一番歌で倉橋部女王「雲隠り」「大殯」の語を詠み込んだのと同様、「非命に倒れた大津に対する最高の鎮魂の方法」であり、王権によって斃された彼らの死を「最高位の人物の死として形象し、あわせてその亡魂の鎮撫を意図しようとした」のだと考察している（多田「大津皇子をめぐって」、『古代国家の文学』所収、三弥井書店・昭和六三年）。「大殯」は天皇の殯宮を表現する時に用いられる。実際は無実ではあったが長屋王は、その神たる天皇の創り上げた王権に反抗し、倒された。大津皇子も同様である。しかし彼らを、やはり天皇の子——神の子と定義づけることで、彼らの死を王権の側に回収しようとしたのではないだろうか。

また、死者の鎮魂を目的として詠まれた歌にしばしばみられる特徴のひとつとして、死地あるいは埋葬地が女鳥王に詠いかけた、

梯立の 倉椅山を 嶮しみと 岩懸きかねて 我が手取らずも

梯立の 倉橋山は 嶮しけど 妹と登れば 嶮しくもあらず (速総別王・六九―七〇)

の二歌謡は、いずれも死への旅路のさなかに越えようとしている地「倉橋山」を詠い込んでいる。他にも、仲哀記の神功皇后新羅征討では皇后とその太子（後の応神天皇）に逆らった皇子忍熊王が追いつめられ、腹心の伊佐比宿禰と共に琵琶湖に身を投げるまさにその時に、

いざ吾君 振熊が 痛手負はずは 鳩鳥の 淡海の湖に 潜させなわ (三八)

と詠っている。また、追いつめられての覚悟の死ではないが、太子の地位にある末弟宇遲能和紀郎子を滅ぼそうとして、逆に彼と次弟大雀命（後の仁徳天皇）のかけた罠にはまり川に投げ落とされた大山守命は、

ちはやぶる 宇治の渡に 棹執りに 速けむ人し 我が許に来む (五〇)

と詠う。これらの歌謡の共通点は、皇位を狙い太子と争った皇子たちが、死ぬ間際に、自分の死地を詠み込んでいる点である。これは、正統なる王者あるいは後継者（仁徳天皇・神功皇后と応神天皇・宇遲能和紀郎子と大雀命）と王権を争った皇子たちが横死した地を歌に詠み込むことにより、王権によって辺境の地で死を押しつけられた彼らの魂を鎮める目的があったと考えられる。古代日本において「見る」という行為は呪的な性格を持っていた。土橋寛氏は、「見る」行為を「タマフリの」すなわち地霊や国の神・魂など自然の霊との共感のはたらきを促すものと定義し、「見る」ことによつて霊の鎮魂も果たされたとする（土橋『古代歌謡と儀礼

の研究』岩波書店・昭和四〇年）。記紀に登場する王権の犠牲者には、王権に崇りをなさぬよう、鎮められることが求められたのではないだろうか。

同じことが『万葉集』にもいえる。『万葉集』巻二挽歌の最初を飾るのは、孝徳天皇の唯一の皇子でありながら、父帝崩後の斉明四年（六五八）、斉明天皇と皇太子中大兄皇子に対し謀反を企てた罪で処刑された有間皇子が詠ったとされる「自傷歌」二首である。

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる歌二首

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る（巻二・二四一―二四二）

有間皇子は斉明四年一月五日、飛鳥宮にて留守官蘇我赤兄に逮捕され紀伊国牟婁温湯に行幸していた斉明と中大兄皇子のもとに護送、九日には同地で中大兄皇子の尋問を受け、都に帰る途上の藤白坂で絞首刑に処されている。一四一番歌で詠われる「磐代」は現和歌山県日高郡南部町岩代、都から紀伊国へ護送される途中通過した地であると考えられる。死地ではないが、死への道行きとなった護送の途上、磐代の地で有間皇子は、磐代の松の枝を結ぶことで己の魂を込め、自らの無事を土地神に祈る歌を詠んだ。その後、紀伊国行幸の際に官人たちによる、「磐代」の松が枝をモチーフにした歌が詠まれるようになった。磐代の松が枝に込めた願いかなわず、都に帰ることなく死を賜った有間皇子の無念に共感し、同情する歌である。高桑枝実子氏は、紀伊行幸時に天皇一行が磐代を無事に通過するために、同地で松が枝に「また還り見む」との願いを込めた自傷歌を詠った有間皇子の鎮魂が必要不可欠であったと指摘する（高桑「有間皇子自傷歌群の示すもの——挽歌冒

頭歌とされた意味」『上代文学』八三（平成十一年）所収、「死と挽歌——『万葉集』挽歌表現の考察」『死生学研究』二〇〇三年秋号（平成十五年）所収）。王権によって滅ぼされた有間皇子の叶えられなかった願は呪いとなり、磐代の地を蝕むおそれがあった。その無念を解消し、呪いをほどくためにも、官人たちは有間皇子の怨みの残る磐代の地で、磐代の結び松を詠み込み彼に共感する歌を詠ったと考えられる。

また、大津皇子が死を目前にして詠んだ四一六番歌では、枕詞「ももづたふ」によって導かれる地名「磐余」は、大津皇子の自邸があった訳語田に近い。長屋王が自邸で死を賜ったように、大津皇子の処刑も自邸で行なわれたとしたならば、「磐余の池」が詠われている四一六番歌は、死地または死地に限りなく近い地を自ら詠み込んだ挽歌であるといえる。

大津皇子に関する挽歌としては四一六番歌の他に、姉の大伯皇女によって詠われたとされる挽歌群がある。

大津皇子の薨^{かむあが}りましし時に、大来皇女の伊勢の齋宮より京に上りし時に作りませる御歌二首

神風の伊勢の国にもあらましをなにか来けむ君もあらなくに

見まく欲りわがする君もあらなくになにか来けむ馬疲るるに（二・二六三—二六四）

大津皇子の屍^{かばな}を葛城の二上山^{ふたかみやま}に移し葬りし時に、大来皇女の哀しび傷^{いた}みて作りませる御歌二首

うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む

磯の上に生ふる馬酔木^{あしび}を手折らめど見すべき君がありと言はなくに（二・一六五—一六六）

右の一首は今案^{かむが}ふるに、移し葬れる歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮^{かむみや}より京に還りし時に、路^{ほろひ}の上に花を見て感傷^{あひらう}哀咽^{あひらう}してこの歌を作れるか。

四首の挽歌は、大伯皇女が天武崩御と大津皇子の刑死を受けて斎宮の任を解かれ飛鳥浄御原京に帰還した時に詠ったという前半二首（一六三・一六四番歌）と、大津皇子が二上山に移葬された時に「哀しび傷びて」詠んだという後半二首（一六五・一六六番歌）に分かれている。移葬された、ということはその前には別の地に埋葬されていたということでもあるが、最初の埋葬地は詠われない。大伯皇女は、大津皇子の最初の埋葬地を詠み込もうにも詠み込めなかつたのではないか。謀反者である大津皇子は、はじめは正式な殯も行なわれないまま、ごく簡略に葬られた可能性が高い。従って一六三・一六四番歌の時点では大伯皇女は大津皇子の埋葬地を詠うことができず、「なにしか来けむ 君もあらなくに」とひたすら弟の不在を嘆き、弟の鎮魂を図っている。

一六三・一六四番歌の「埋葬地のない挽歌」では、女の身内Ⅱ大伯皇女による大津皇子の鎮魂が詠われる。そして彼女によつて一六五―一六六番歌の「移葬歌」が詠まれると共に、大津皇子は正式な埋葬地に葬られる――「移葬歌」には埋葬地を詠み込まれる。一六五番歌では、「うつそみの人にあるわれ」――と死者大津皇子との断絶を描き分けている。「うつそみ」または「うつせみ」という語は、大野晋氏が「現都志意美」を語源にもつと指摘し、「うつし（現）+おみ（人）」という構造に定義して（大野「うつせみ」の語義について）『文学』一五―二（昭和二年二月）所収）以来、『万葉集』中においては現実世界に生きる人間の意として解釈される。大伯皇女が「うつそみ」としての「われ」を自覚し強調するのは、「うつそみ」ではない――死んでしまった大津皇子にも、その死を自覚させる必要があつたのではないか。かくして大津の靈魂は、正式な葬地・二上山に鎮められる。

一六六番歌の「ありと言はなくに」という定義づけによつて、大津皇子の死という厳然たる事実が再確認される。「あしび」を「見」せるといふ歌の展開に大津皇子の魂の復活をまだ望んでいることがうかがえるが、

それも結局は弟の死というどうにもならない現実を再確認するための設定と化し、深い諦念が漂っている。それは大津の靈魂に死を改めて自覚させ、二上山に永遠に鎮まらせるのに必要であった。かくして天武王権の犠牲となった大津皇子の「歌物語」は、靈魂の鎮定をもって幕を閉じる。

挽歌では、常に生者たる詠み手と、死者との断絶が描かれるが、それは愛する者もはや逢うことのできぬ悲しみを表出すると同時に、死者にその死を自覚させ、慰める意味があつたと思われる。大津皇子のように、王権の力により恨みを抱いて死んでいった、王権に仇をなす悪霊となりかねない靈魂に対しては、鎮魂のため最大限の努力が払われていた。

四

王権を担う一員でありながら王権に反逆し、王権によつて滅ぼされた者の靈魂は、その怨みのために王権の安寧を脅かしかねない危険をはらむとみなされた。従つて彼らの魂は鎮められ、王権の中に回収し直されなければならなかつた。そのために、『古事記』『日本書紀』『万葉集』を中心とした上代文学においては、王権侵犯を恋の禁忌侵犯——天皇や皇太子の后妃を奪う、または近親相姦など恋の禁忌を破るなど——として悲劇的に描き、その死を天皇に擬し、挽歌に死地を詠い込むなどして、彼らの鎮魂が図られたのであつた。

朱鳥元年（六八六）大津皇子の変を最後に、皇族が実力行使で王権に挑戦したという理由で滅ぼされる事態は、神龜六年二月一三日の長屋王一家の自決までしばらく途絶える。律令が整備されて法制国家化が進むにつれ、法によつて嫡系相続が保障され、いよいよ特別化されていった天皇と嫡系の皇族以外の皇子女・王族は、その皇族としての聖性を次第に失い、天皇の臣として、貴族たちともども「官僚化」されていく流れにあつた。

その中で、禁忌の恋のモチーフは直接的な王権侵犯から離れ、叶わぬ恋の苦しさそのものに次第に重点を移していった。例えば『万葉集』巻二相聞部には天武の若い子供たち、穗積皇子と但馬皇女の歌物語的恋愛歌群が登場するが、但馬皇女を所有するのは天皇や皇太子ではなく、年の離れた異母兄で太政大臣の高市皇子である。ふたりの恋は穂積皇子が勅命で志賀の山寺に送られる事態を招くが、ふたりが王権によって滅ぼされることはない。

森朝男氏は、時代が下るにつれて『万葉集』の相聞・挽歌は、その基調に存在する恋の規制と反乱の結合という記紀の形式が崩れ、男の反乱者としての像が薄れてゆく傾向にあると指摘している（森「古代文芸の継承と展開」美夫君志会編『万葉史を問う』所収、新典社・平成十一年）。それは、相聞歌が宮廷の公的な場から、私的な恋愛の抒情歌へと移り変わる過程でもあったのかもしれない。

■ 註

1 本文は、『古事記』は『新日本古典文学全集』（小学館・平成九年）、『日本書紀』は『日本古典文学大系新装版』（岩波書店・平成五年）、『万葉集』は中西進『万葉集』全訳注原文付（講談社文庫・昭和五三〜五五年）を使用する。ただし、一部訓などは稿者自身の判断で変えている箇所もある。

2 七九番歌謡を受ける「是以」をめぐっては、神野志隆光氏の、「是以」は原因・理由を示すものではなく、この語によつて接続される内容が因果関係を為す以上の意味を持たないとして、允恭記の「是以」は軽太子が即位に至らないうちにということをさすのであり近親相姦の露頭と軽太子の政治的失脚とは何ら関わりを持たないとする説（軽太子と軽太郎女の歌謡物語語について、『論集上代文学』一四、昭和六〇年、「古事記の悲恋——軽太子・軽太郎女の物語」久保朝孝編『悲恋の古典文学』・世界思想社・平成九年）や、身崎壽氏の、『古事記』中巻の「是以」は「於」

是」などと違って確実に先行部分をうけとめるはたらきを有する語であるとした上で、『古事記』の作品世界において、歌謡物語の「ウタ」と「モノガタリ」との結合は「ウタの表現のある限定された部分（語句あるいは情感なども含め）に注目し、その部分にモノガタリとの連係を託してしまふ」性格のものであり、他の部分の整合性如何を拘泥することはないと唱える説（軽太子物語——『古事記』と『日本書紀』と——、『古事記の歌』高科書店・平成六年）などがある。「是以」も含めて議論は慎重に行なわなければならないが、記紀の歌謡物語において歌謡と散文が有機的に連関していることは否定しがたいのではないか。本論では、七八・七九番歌謡の詠われた逢瀬を受けて、すなわち同母兄妹婚のタブーを破つたために、人心が軽太子から離れたと読解する。

3

垂仁天皇に逆らつた沙本毘古・沙本毘売兄妹（紀では狭穗彦王・狭穗姫）は兄の宮に築かれた稻城へ、敏達天皇の崩後謀反者の汚名を着せられた三輪若逆は三輪山へ、孝徳天皇のもとで右大臣まで務めながら謀反者と讒言された蘇我山田石川麻呂は山田寺へそれぞれ身を寄せている。

（えびな・みどり 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

“Death in Royal Authority” in Japanese Ancient Literature

Midori Ebina

For the ancient Japanese royal authority, the most dangerous thing was treasons — especially, by those who belong to the Imperial family. Though their plots were always crushed, those rebels were feared to be evil spirits which harmed royal authority. Royal authority tried to prevent such disasters, by describing rebels as tragic people in Japanese ancient history books (“Kojiki” “Nihon-Syoki”) and the first Waka collection (“Manyoshu”), reposing their dead soul.

Their rebellion often describes as forbidden love affairs such as love with ladies of Emperor, who cover themselves with the country’s spirit. Getting these women, rebels tries to rob of the throne. As for the story of the purged crown prince, his crime describes as the incest with his full sister. Justly their love lead them to ruin for the encroachment on royal authority.

When rebels who are executed, “Banka” (tragic elegies) are written for the victims. These Banka contains their death spot for making their souls recognize their death and resting in peace at the spot. Another feature of Banka for rebels from the Imperial family is comparing rebels’ death to Emperor’s death, treating them as members of Imperial family. So that, their souls are calmed and taken in the royal authority. As the lateral members of the Imperial family are established as feudatory to Emperor, the form of reposing the Imperial rebels against the royal authority gradually changes into pure love lyric Tanka.